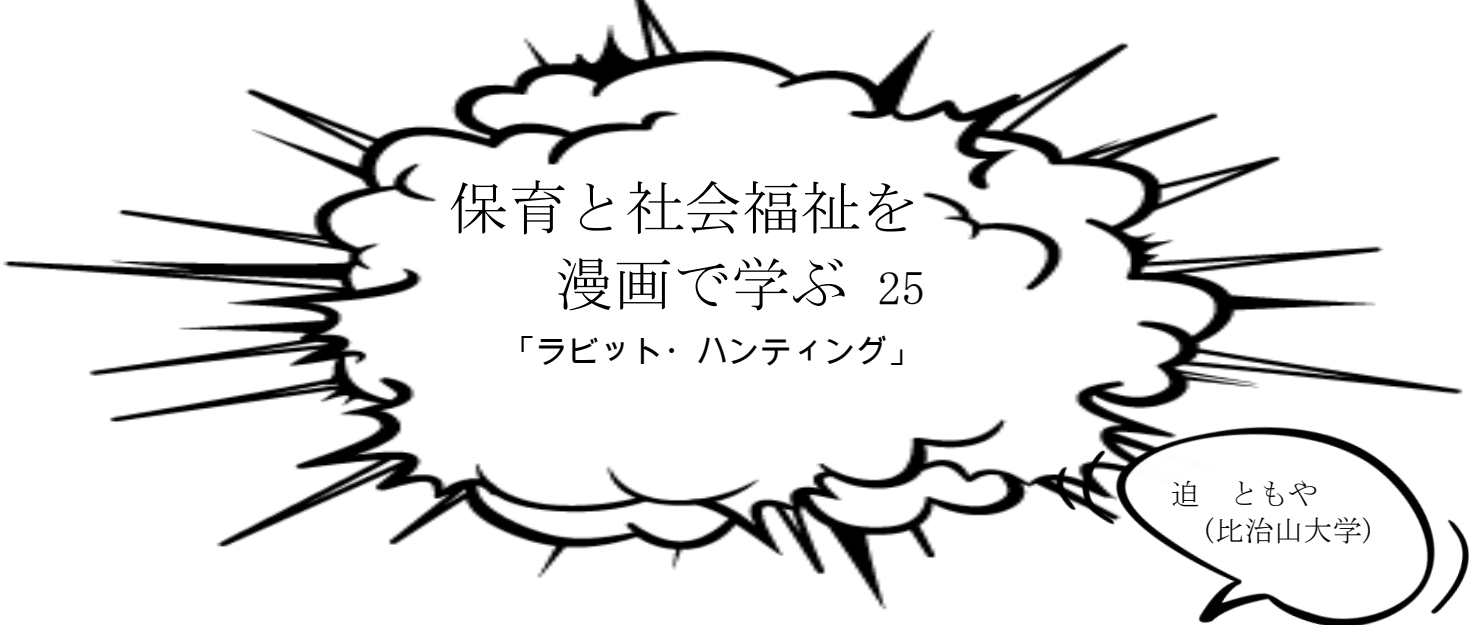




保育と社会福祉を 漫画で学ぶ 25 「ラビット・ハンティング」

迫 ともや
(比治山大学)

TONO さんの「ラビット・ハンティング①②」(2003、2007) を紹介します。モデル事務所に所属する少女少女と、かれらをめぐる大人たちが織り成す、セクシュアリティの傷つきのアンソロジーです。

天使のように無邪気でストレートな少女、チャイナ。彼女のいとこ、あけっぴろげででたらめ話を能天気話す少年、ジョンジョン。二人の親友で正義感の強い少年、クロムの 3 人が中心人物です。モデルの子たちのお話なのに、「うさぎ狩り」がタイトル？ と思いませんか。

男子ロッカールームに入りびたるチャイナは、女子ロッカールームから締め出されそうになっている。群れて生きようとする女の子たちから「いつもジョンジョンベったり」「みんなになじもうとしない」「感じ悪いのよ」と言われ、突然始まった生理に困っても、チャイナは薬局の場所を教えてもらえない。遠巻きに見ている女の子たちをよそに、クロムは「スーパーでナプキンを買ってくるよ」とつげる。母子家庭で育った彼は、母親のために買いにいったことがある。それに、チャイナへの好意もあった。

クロムに口うるさく指示を出す男性スタッフのフリッツは、事務所の誰ともうまくいかに、辞めた。だがその日の午後までフリッツはどこかに隠れていた。ロッカールームにひとり残ったクロムに、フリッツが襲いかかった。気づくとクロムは両手をテーブルに縛りつけられ、口にテープを貼られていた。フリッツはクロムの体をまさぐりながら「ゆっくりあそんでやるよ」と口にする。

そのとき、ロッカールームに入ってきたチャイナが助けを呼び、クロムは助かった。

フリッツからの性被害が深刻だったのか、病院に入院したクロム。フリッツは留置所に送られたらしい。見舞いにきたチャイナは、無邪気な顔でクロムにいう。「ねえ…私が、もしもフリッツがあなたにしたみたいなのをしたら…嫌？」

クロムは驚きながら応じた。初めてだったことが済んだあと、クロムはおどおどしながら「愛してる」と口にする。しかしチャイナはうつむき、「ごめんなさい」と残して病室を去った。

おかしい事を言ってしまったのかと考え込むクロムに、ジョンジョンは、「あいつはビギナーにも慣れてるもん。平気平気」と笑いかける。「チャイナはそういう奴なんだよ」。だから女子たちの仲間にも入れて貰えないのだと。

チャイナはクロムに話しかける。「ちょっとお見舞いのつもりだったのに、ごめんね。愛してるなんて言うんだもん」。

「言うだろう、ふつう」というクロムに、チャイナは「私にはおしおきだった」と返す。彼女は6歳の時から家庭教師によって性被害を受けていたのだ。

チャイナはその後、何度も被害に会った。「うさぎ狩りだと思えば理解できる。きっと私、血の匂いがするのよ。キツネはケガしたうさぎを追いかけるもの」「途中から服を破られるのが嫌だから、自分で脱ぐし、殴られたくないから、自分から足を開くようにした」。

(『ラビット・ハンティング①』より「ラビット・ハンティング」)

チャイナは性被害から奔放な性行動をとることになったようです。「自分が傷つけられたことをクロムもされた。慰めてあげられるなら」ととった行動が、クロムには予想外に大きな経験だったのです。

人は大切にしていることを傷つけられると、自分を周りと同じだと感じにくくなってしまいます。「自分だけあんなことをされた」「自分は汚されてしまった」という気持ちが芽生え、周りから浮いた言動をつい選択して、「みんなになじもうとしない」と扱われます。はみ出し者になると被害を受けても周りが助けてくれなくなり、悪いループにはまってしまいます。「なじもうとしないあの子が悪い、自業自得だね」と仲間が見捨てると、血の匂いにひかれてキツネたちがやってきます。「うさぎ狩り」は現実世界の様々な場面で行われています。

父親に先立たれたチャイナは母親の元を離れて、モデル事務所の社長のもとで暮らしている。クロムも若くて美人の母リンカとの母子家庭。母の上司が母を襲おうとしたとき、クロムは上司の尻をナイフで刺した。仕事を無くした母が困った末に、クロムはモデルの仕事を始めたのだった。

仕事に空き時間ができた日、クロムはチャイナに、家でお昼ご飯を食べようと誘った。家に入ると、服が脱ぎ散らかされており、リンカがジョンジョンとベッドをともにしていた。年齢を偽って母親に取り入ったと聞いたクロムは激怒し、ジョンジョンに殴りかかる。リンカはケガをしたジョンジョンに「もうつきあえないわ。あなたの年じゃ、私は犯罪者よ」と告げ、車で病院に連れていくことに。「そんな奴、送ってくこたない!」とキれるクロムに「あなたがケガさせたのよ!」とリンカ。

母親に叱られてしょんぼりしていたり、縛られて涙目になったりしていたクロムに、チャイナはときめいている自分に気づく。
(『ラビット・ハンティング①』より「ラビット・ハンティング2」)

傷つきを抱えたチャイナは、しっかりしているように見えても、自分と同じく傷つくクロムにひきつけられているようです。チャイナはクロムの姿に触れることによって、自分の傷を癒そうとしているのかもしれませんが。傷ついた人が傷ついた人を癒すことがあります。当事者同士の助け合いはそのような取り組みです。傷ついた経験がないと癒せない訳ではありませんが、自分と同じく傷つき、それでも生きようとする他者の姿から、人は生きる力を得ることができます。さらに考えを深めると、対人援助の専門職にも傷ついた当事者はいます。「傷ついた癒し手 (Wounded Healer)」という言葉があります。

現代の心理学関連で「傷ついた癒し手」に最初に言及したのは、ユングだと言われています。ユングは、「より深いところに達するあらゆる治療は、およそ半分が医師の内省にある」として、「医師が患者において正すことができるのは、自分自身において正したものだけ」であり、「自分自身の傷つきの分しか、医師は治すことができない」と述べています。

またユング派の分析家であるグッゲンビュール＝クレイグは、治療者も患者も含めて全ての人が「健康－病気」という元型を持っているといいます。

治療の場面では、患者は治療者に「内的な治療者」つまり自らにも備わる治療者の部分を投影し、逆に治療者は患者に自分自身の弱さや傷つきを投影します。ここで治療者が、自分の内的な傷の存在を自覚できていれば、患者の中にいる「内的な治療者」が育ち、より治療的な関係が効果的に進みます。このとき、表面上（意識）は「治療者が癒しを提供し、患者が癒やされる」という構造ですが、深層（無意識）では、逆のことが起こっているようです。つまり「患者が癒しを提供し、治療者が癒やされている」と。

実はジョンジョンも、夫婦間の悩みをもった母親から性的な虐待をされたとリンカに告白しています。クロムはそれもいつものでたらめ話ではないかと疑いますが、傷つきを抱えた子どもがでたらめ話をすることともまた、よくあることなのです。自分を見てほしいという甘えの欲求による行動であったり、空想に逃げることで現実認識が歪んでしまうこともあり得ます。少年少女らにとってかつての傷を負ったエピソード、そして現在の逸脱行動は、小さなトラブルと和解になって日常を進めていきます。

クロムは昔のできごとを思いだした。6歳の夏、山の中のキャンプ場で、スタッフの大人もモデルの子どももみんなヌードになって写真を撮ったことがあった。山のように丸裸の人を見たのはあのときだけなのに、クロムが覚えているのは人の身体に刻まれた傷のことばかりだった。

「別れた男に刺された」「バイクで転んだ」「胃を全部とったんだ」「この子がここから出てきたの」…圧巻だったのはスタッフのアイカだった。身体の右側ばかりに刃物で切り刻んだ傷跡が無数にあった。「私が左ききってことよ」…。

その秋には事務所を辞めたアイカについて、「実の父親の子どもを流産したことがある」「薬の飲みすぎで死んじゃったんですって」などと様々な噂が流れた。もうそれからずいぶん経っている。

クロムはその後、飲食店で働いていたアイカに会いに行った。「あの時、どうしてあんなに傷だらけの体を…隠さずにみんなに見せたんですか？」

アイカは、今もリストカットの跡がある右腕をクロムに見せた。「これは私が生き延びた記念。こうしなければ生きられなかった。これは私が負けずに生きぬいた証拠。誇らしい大切なもののよ。だからきっと、他人にも見せたかったんでしょね」。

アイカのもとには半年前に生まれた赤ん坊がいる。「おかげで忙しくて、なんにもするヒマがない」とアイカは赤ん坊を胸に抱いた。（『ラビット・ハンティング②』より「ラビット・ハンティング7・8」）

人間は若いうちは肌もきれいで傷も少ないものですが、年齢を重ねると皺やシミ、消えない傷跡が多くなっていきます。人の身体の傷は、その人の歴史を示す痕跡なのかもしれません。

自傷行為は、当事者によると「自殺したり、突然暴れたりしないためにする」ことです。傷ついた経験が思い出されたとき、激しい怒りや不安、悲しみ、緊張などに混乱した気持ちが起こります。感情をいったん静め、落ち着かせるために自傷は行われます。耐えられない経験を強いられ、加害者から逃れられないような状況にあるとき、人間は自傷行為によって意識状態を変えることができるという研究があります。自傷によって痛みが発生するとともに、βエンドルフィンなどの脳内麻薬様物質の濃度が上

昇し、鎮痛効果が得られます。ただし、これは繰り返しの要因になりますし、耐性がつくためにどんどん自傷が深くなっていくのです。また、当事者自身がそのメカニズムに気づいているとは限りません。つらい気持ちに苛まれている自分から意識を消すために薬を大量に飲んだり、万引きや逸脱的な性行為をすることも、自傷行為の代わりになることがあります。チャイナの奔放な性行動もそうだったのかもしれない。

実際に自傷をする人を見たら、するべきでないことがいくつかあります。自傷を頭ごなしに否定すること、責めること、もうしないと約束させること、理解できないのに理解しているように話すこと等です。当事者にひとりで抱え込ませないことも大切です。

アイカは子どもができたことで「なんにもするヒマがない」状態になっています。一人では何もできない赤ん坊の世話をすることは、大きな癒し効果があります。赤ん坊は無能力状態で周りに投げ出されているのに、周りの世話を引き出す力をもっています。養育者は、赤ん坊の姿のなかに世話をされて喜ぶ自身の反映を見ており、赤ん坊も養育者のなかに力強く有能な大人の反映を見ているのではないのでしょうか。傷つきを抱えた人が赤ん坊に触れ、援助者としてふるまうことは、傷つきを癒すことになり得ます。人間には「健康－病気」と同じように機能する、「赤ん坊－養育者」のような元型もあるのかもしれない。くわえて実際に忙しくて、自分の傷つきに苛まれる余裕がなくなること効果的です。忙しいことは、逆説的に傷つきから離れる余裕をもたらすのです。

「傷ついた癒し手」は、傷ついた人を癒すことで自分の傷を回復させることができると書きました。このことはおそらく、本や漫画、映画などを見ることによっても得られる経験だと思うのです。つまり傷をもつ読者が『ラビット・ハンティング』のような作品を読むことは、読み手のなかの「内的な治療者」を活性化させることになるのだと思います。

2024年6月に日本版DBS法が成立し、子どもへの不同意性交等の犯罪歴の照会が可能になりました。しかし、逮捕歴のないジャニー喜多川氏が存命であっても、この法の対象にならないことは大きな課題として議論の余地を残すことになります。

紹介作品：

TONO (2003-2007) 『ラビット・ハンティング①②』新書館

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に改変している場合があります。

参考文献

C. G. ユング (横山博監訳) (2018) 「心理療法の根本問題」『心理療法の実践』みすず書房

A. グッゲンビュール＝クレイグ (樋口和彦・安溪真一訳) (2019) 『心理療法の光と影―援助専門家の《力》―』創元社

松本俊彦 (2012) 「自傷行為の理解と援助」『精神神経学雑誌オンラインジャーナル』

<https://journal.jspn.or.jp> > jspn > openpdf (最終確認：2024.08.15)

※ご感想・ご意見などは筆者のメールアドレスまでお寄せください。⇒ sakotomoya@gmail.com